



ふるさと 埼玉県の  
民話と伝説

県別民話シリーズⅢ

荻塚一三郎

## 〈著者紹介〉



韭塚一三郎（にらつかいちさぶろう）

1899年埼玉県深谷市に生まれる。

埼玉県師範学校を卒業。

埼玉県立埼玉図書館長，大宮市教育長などを歴任。

現在：埼玉民俗の会々長，埼玉県郷土文化会々長，

埼玉県文化団体連合会々長，埼玉県史編さん委員，

与野市史編さん委員長，日本図書館協会顧問。

著書：『埼玉県伝説集成』『埼玉地名誌』（北辰図書）

『埼玉の女たち』（さきたま出版会）ほか多数。

現住所：埼玉県与野市与野1670

〈さし絵指導〉 新井邦雄（あらい・くにお）

日展会友，一水会々員，水彩連盟会員，大潮会々員。

現在：関東短期大学講師。

## ふるさと埼玉県の民話と伝説

印刷 昭和57年4月15日

発行 昭和57年4月20日

著者 韭塚一三郎

発行者 能勢 潔

発行所 千秋社

〒101 東京都千代田区

西神田3-9-14 吉田ビル

振替 東京 1-185053

☎ (03) 264-6718 (代)

印刷 図書印刷

4462 ISBN 4-88477-061-7 C 0039 ¥980E

乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。

ふるさと

埼玉県の民話と伝説

畦塚一三郎

カバー題字・埼玉県知事 畑和氏

## 目次

|                           |           |
|---------------------------|-----------|
| 歴史編（村・屋敷・聖地・建物・神仏・事件などの話） |           |
| 猫檀中（深谷市）                  | 8 絵・森谷恭子  |
| わらび長者（秩父市）                | 11 絵・中村桂子 |
| オーサキ持ちの家（秩父市）             | 15        |
| 梅若塚（春日部市）                 | 17 絵・山口悦子 |
| 勘七猫塚の話（所沢市）               | 22        |
| ロマン重衡塚（児玉町）               | 25        |
| 奥武蔵の平将門（秩父市）              | 29        |
| 白米城（吉見町）                  | 32        |
| 巡礼堤（幸手町）                  | 35 絵・片山恒子 |
| 伝説の川越城（川越市）               | 39        |
| 涙橋二話（行田市・大宮市）             | 43 絵・山口要子 |
| 賽取左衛門の話（寄居町）              | 46        |
| 権八地藏（熊谷市）                 | 49        |
| 田植え地藏（日高町）                | 52 絵・山口政子 |

夜ばい地蔵(三芳町)……………55

女郎買い地蔵(桶川市)……………58

浦和の咳婆(浦和市)……………62 絵・椿山信子

馬蹄寺の由来(上尾市)……………66 絵・井上弘子

お女郎様(川口市)……………70

松がきらいな聖天様(妻沼町)……………73 絵・清水弘子

犬が運んだ大聖寺の土玉(川島町)……………77

毛長明神の話(草加市)……………79 絵・中村桂子

八百比丘尼(川口市・皆野町)……………82 絵・白井京子

蛇崩れ(所沢市・両神村・名栗村)……………85

西行もどり橋(寄居町)……………87 絵・加藤尚子

岩槻落城伝説(岩槻市)……………90

浄山寺の片目地蔵(越谷市)……………94 絵・海老原恵子

水子観音(富士見市)……………95

### 信仰編(神・精霊・靈魂・行事などの話)

雷電山の山姫(玉川村・東松山市)……………98 絵・笠原 徳

与市兵衛地蔵(羽生市)……………101

見沼の笛(大宮市)……………103 絵・三井田経子

|                                   |             |
|-----------------------------------|-------------|
| 慈恩寺の人身御供の話(岩槻市) .....             | 107         |
| 雹の降らない村々(蔵市) .....                | 108 絵・藤波 武  |
| 尻あぶり(東松山市) .....                  | 112         |
| 幽霊の話(行田市) .....                   | 116 絵・大倉桜子  |
| 見沼の竜神(大宮市) .....                  | 118         |
| 妖怪・変化編(きつね・たぬき・テング・カッパなどの話)       |             |
| 奥武蔵のテング(飯能市・日高町・都幾川村) .....       | 122 絵・吉田久子  |
| 鬼と神力坊(東秩父村) .....                 | 127 絵・藤谷照子  |
| たぬき和尚さんのはなし三話(所沢市・東松山市・志木市) ..... | 130         |
| きつねの仲人(熊谷市) .....                 | 134         |
| きつねに化かされたはなし三話(東秩父村) .....        | 138         |
| カッパの妙薬(熊谷市) .....                 | 141         |
| カッパのわび証文二話(所沢市・児玉町) .....         | 145         |
| 二人のカッパ与兵衛(妻沼町) .....              | 148 絵・安井ヒロ子 |
| 送りおおかみの話(横瀬村) .....               | 153         |
| ふるさと妖怪ばなし三話(川越市・入間市・川島町) .....    | 155 絵・青木恵美子 |
| 瀬女(皆野町) .....                     | 159         |
| 山姥のはなし二話(横瀬村・大滝村) .....           | 161         |

自然編（植物・岩石・山・池・沼などの話）

沈鐘伝説（戸田市・深谷市）……………164

たもと石の話（小鹿野町・東秩父村）……………166

奇人即道坊（荒川村）……………168 絵・田中和子

夜泣石の話（児玉町）……………172 絵・五十嵐尚子

寅御石（蓮田市）……………175

ダイタ坊（横瀬村・川越市）……………177

弘法清水（所沢市・両神村）……………179 絵・福田久男

子は清水（吉田町）……………183

ウバガ池二話（小川町）……………184

よな川の小石供養（川越市）……………186 絵・島崎清海

西行法師見返松（杉戸町）……………189

解説編……………191～251

後記……………252

カバー・本文のさし絵は、浦和市内の絵画クラブの方々のご協力をいただきました。（敬称略）  
さし絵指導／新井邦雄



— 歷史編 —

## 猫檀中（深谷市）

深谷市人見の昌福寺は、人見山と号し、深谷上杉房憲ふさのりの開基で、江戸時代には寺領二十石の朱印をもらっていた、禅宗の名刹めいさつである。

むかし、この寺が一時（戦国の代であろう）たいへん衰微したことがあった。そのため寺には、ひどく年をとった和尚と、一匹の虎猫こねこだけがあって、いつもいっしょに炉いろばたで、居眠りばかりしていた。このように衰微した一つの理由は、長在家村（現大里郡川本村長在家）の檀家十数軒が、こぞって離檀してしまったからである。

この檀家には、自分の屋敷から、文殊様で名高い野原村（現大里郡江南村野原）まで、十キロのところを、他人の土地を踏まずにいったという、長者もまじっていた。そのため長在家村の離檀は、寺の衰微に一層拍車をかけることになった。

老いて先きのない老和尚は、離檀した長在家村のことをおもい出すと、寂しさが一層加わって、ど



うしようありません。そこである日、胸中を猫に物語った。すると猫は、和尚の顔をじっとみつめていたが、やがて人語で、

「ながい間、お世話になりました。そのご恩返しに、もういちど寺を繁昌させるようにしましょう。」

と、言い、さらに言葉をついで、近いうちに長者が死ぬ。その葬式の時、自分は棺をつりあげようとおもう。和尚さんは、ころあいをみて、

「南無トラヤヤ」と、唱えてくださいと言った。

はたして、猫の予言のように長者がポツクリ亡くなった。葬式の日には、長在家村の善法寺、弥勒寺はもとより、近隣の僧が多数集まって、式は盛大を極めた。しかし昌福寺の和尚は、忘れられて呼ばれなかった。

葬儀がすんだので、葬列は門を出て、静かにお

墓へと向っていった。ところが、今まで晴れていた大空が、急にかき雲り、鋭い稲妻と、ごうごうたる雷音は、篠つく雨を呼び、それが、葬列を襲ってきた。そこで驚きあわてた親類縁者は、棺を道端においてまま、退散してしまった。

やがて雷雨が遠のき、晴間もみえたので、人々は、ふたたび葬列を組もうとして棺に近づいて来たと、ところが、その人たちの眼の前に、ふしぎな光景があらわれた。棺が宙づりになってしまったからである。

なみいる僧たちは、秘術をつくして経文を読んだり、しきりに数珠じゆずをもんだが、いっこうに効果がない。そこで長者の家では、誰でもいい、棺をおろした者には、寺も普請するし、どんな寄進にも応ずると言ったが、どの僧にもおろすことができなかった。

すると、誰かが、昌福寺の老和尚をおもい出して迎えに行った。

よばれた老和尚は、腰をまげながら杖を突いて、トボトボとやって来た。そして経を読んだ。

この時老和尚は、猫の言った言葉をおもい出し、いかげんの時に、「南無トラヤヤ」と声をかけた。その声に応ずるかのように、棺はするすると降りて来たが、それが葬式の向う方向と逆に、昌福寺の墓地に行ってしまったのである。これには人々も肝をつぶし、声も出なかった。

この光景をみた長者の家では、棺が昌福寺の墓地に行ってしまったのは、死人が昌福寺が好きなの

であろう、ということになって、旧来のように、昌福寺の檀家にもどることになった。そのうえ約束にしたがって、昌福寺の普請をする、多額の寄進もしたので、寺は繁昌をとりもどすことができた。棺を宙ぶりにし、しかもそれを昌福寺墓地に持っていたのが、昌福寺の猫と知れ、以来、長在家の昌福寺の檀家を「猫檀中」と唱えるようになった。

（解説一九二頁）

### わらび長者（秩父市）

秩父の高篠山の中腹に、長者屋敷跡と呼んでいる平地がある。ここに秩父の長者といわれた富豪がすんでいたという。

初代の長者は俗にいうケチンボで、多くの部下をひきいて財を積み、二代目の長者は先代に劣らぬ貪欲無情で富を増し、広大な邸宅を誇り、何十という倉には金銀珠玉が満ち、その屋敷の周囲には千軒の部下の家が軒をつらねて、王侯の生活もかくやとおもわせた。

しかし、その栄華も永くは続かなかった。三代目の長者は、いままでの威光を誇って傍若無人のふ

るまいが多く、ことに恐るべきものに恐れないう慢心の日常。そこで、没落の運命は、ようやくこの長者の屋敷の屋根の上にも、暗い翼をひろげてきたのである。

春には例年の行事である、わらび狩が行なわれる。ある春のうらかな日であった。長者はふと思いついて、千軒の部下の者を集め、

「今日は例年の通りわらび狩じゃ。お前たちは一日で秩父の山のわらびを摘め、そして一本残らずわが倉へ収めるがよい。自分の家族は、高篠山のわらび狩を受け持つとしよう。」

という命令である。

部下の者たちは、この命令がいかに難題であるかはわかりきってはいたが、長者のきげんをそこねては、後でどんなひどい目にあうかも知れないとおもったので、不承不承わらび狩にとりかかった。

長者はこのありさまを高篠山の上からはるかにながめ、われとわが威光に得々として、日の丸の扇をかざして、

「ものども、日頃の忠勤をみせるはこの時ぞー。」

と、人々を鼓舞した。

一方、長者の家族は、千軒の部下たちが秩父の山々のわらびを狩りつくすのにくらべれば、自分たち百人が高篠山のわらびを採るくらいは、なんでもないことであるという、長者のおごりをそのまま

信じこんで、悠々とかまえ、すでに太陽が中天に昇るころになって、ようやくわらび狩にとりかかった。

ところが驚いたことに、昨日までわらびのあまりなかった高篠山に、今日はまたなんと多くのわらびが生えていることであろう。

満山残らずわらびといってもよいほどである。これでは油断してはいられないと、長者の家族は懸命になって採ったけれども、いつしか春の日が西へ傾くころになっても、まだ半分も摘みとることができないのである。家族の驚き、さらに、ぼう然としているその姿をみると、長者はじっとしてはいられなかった。

そしていまいまいそくに夕日をにらんで、

「なんというこっちゃ、わしの威光を知らんか。招き返してみせるわ。」

と、わめいて、今やまさに沈もうとする太陽をさし招いた。すると、長者の威光が天まで届いたものか、沈みかけた日輪がふたたび徐々にもどりはじめた。長者は大きく胸を張って、得々然と、わが



威光に酔うのだった。

一方、秩父の山々のわらびを採りつくそうと、必死の作業を続けていた千軒の家族は、今ちょっとで採りつくせるところを、太陽が沈みかけたので、恐怖のあまりただおろおろしながらわらびを摘んでいた。ところがふしぎにも太陽がふたたび中天にまいもどったので、さいわいにこの難事をなしとげることができて、安堵の胸をなでおろすことができた。

ところが、その頃になっても長者の家族は、まだ高篠山のわらびを採りつくせないでいた。それもあるはず、秩父の山のわらびが、赤とんぼが群をなしてスイスイと飛ぶように、高篠山に向って飛んで来ては生えるのである。

長者はこのありさまをみて、これまでの得々たる高慢な姿はどこえやら狂わんばかりになって、ふたたび日輪をよびもどそうと日の丸の扇をあげてさし招いた。けれどもこんどは自由にならなかった。山頂の長者は狂乱のあまり、むちゃくちゃに扇を上下した。しかしどうにもならなかった。それどころではない。扇を上下するたびに、建ち並ぶ長者の倉の一つ一つが消え去って行くのではないか。しかもその最後の扇で、山頂の長者の姿も、広大を誇る長者の邸宅も消えていったのである。それは夕日が山のかなたに沈みきると同時にであった。

今、高篠山を訪れると、そのむかし長者が日の丸の扇をもって太陽をさし招いたという山頂や、そ



の広大を誇ったという屋敷跡も、一帯に雑木林と化し、さらにその庭園にあったという長者松も跡さえとどめず、ただ長者栄華の夢のはかなさを語るかのようである。

(解説一九三頁)

### オーサキ持ちの家（秩父市）

このごろでもまだ農村には「キツネつき」の迷信が残っているようである。

去る昭和四十八年県内の出来事だが、病気の娘をその母親が「キツネがついた」といって、ひどい折檻を加え、ついにその娘を死にいたらせたという惨事が新聞に出た。この時記者の往訪を受けた私は、そのような惨事が迷信による無知からおこるものであることをのべて、その絶滅をねがった。本書に「キツネつきの家」と題して書くのもまったくその趣旨によるものであることをまず最初に断っておく。

ところで、地方にはいまだ「キツネつきの家」とか「オーサキ持ちの家」とか呼ばれている家が残っていて、他の家から嫌われているようである。「キツネつき」の俗信は、この「オーサキ持ちの家」